

Introduction

春の七草

グルメ、飽食の時代である。若菜を摘み、道ばたの野草を食卓にのせるなど、すっかり遠くなってしまった昨今。ただ、正月七日の七草粥に、一昔前の風習がしのばれる。

春の季節を代表するものとして選ばれた七種の植物。セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ。中国の風習を取り入れ一年の邪気を払うものとして食す、正月七日に現在でも地方によっては七種全部入れないまでも何種か取り入れて七日早朝に収穫して七草粥として食卓に上がるといわれています。また、

今日では何種か選んでパックに入ってスーパーの店先に並んでいるのを見かけます。志木高構内にもスズナ・スズシロを除き、ほとんどが自生しています。参考書によると七草の語源はとても奥が深く、この紙面では表現できないですが、呼び名一つをとっても、ゴギョウはハハコグサを、ハコベラはハコベを、ホトケノザはタビラコ(正確にはコオニタビラコ)を、スズナはカブを、スズシロはダイコンをさすなどの違いがあります。

そこで七草をなぜそのような名前と呼んだのか、その由来を一部紹介しますと、鈴は神を呼び清白(すずしろ)は汚れのなさを表徴しているとれる。ハコベラは「はびこる(栄える)」、タビラコは「田開く」の転訛、セリは「競り」で、それに御形、仏の座といずれも新年の儀式の美称や縁起名を思わせる。ナズナの語源を撫で菜とすれば、これも身体を撫でて、穢れを祓ったのであろうか。七草の行事は中国の正月七日の人日(じんじつ: *1)の夜に渡るとされた鬼鳥を、床や戸を打つなどして追い払う鳥追いと、その日に食べる七種の菜で作った羹(かん: *2)が源流だが、日本の呪術も結びつき、現代に続いているのである。

なお、この七草の由来については川越図書館の蔵書(古書)による。

これを機に、自然環境に恵まれた構内を散策してみてください。初めて目に留まる植物もたくさんありますよ。

【春の七草】

芹(せり) 薺(なずな) 御形(ごぎょう) 繁縷(はこべ) 仏の座(ほとけのざ) 菰(すずな) 清白(すずしろ)

*1: 人日(じんじつ) = 五節句の一つ。陰暦正月七日の節句。七種の粥を祝う。

*2: 羹(かん) = 雑煮

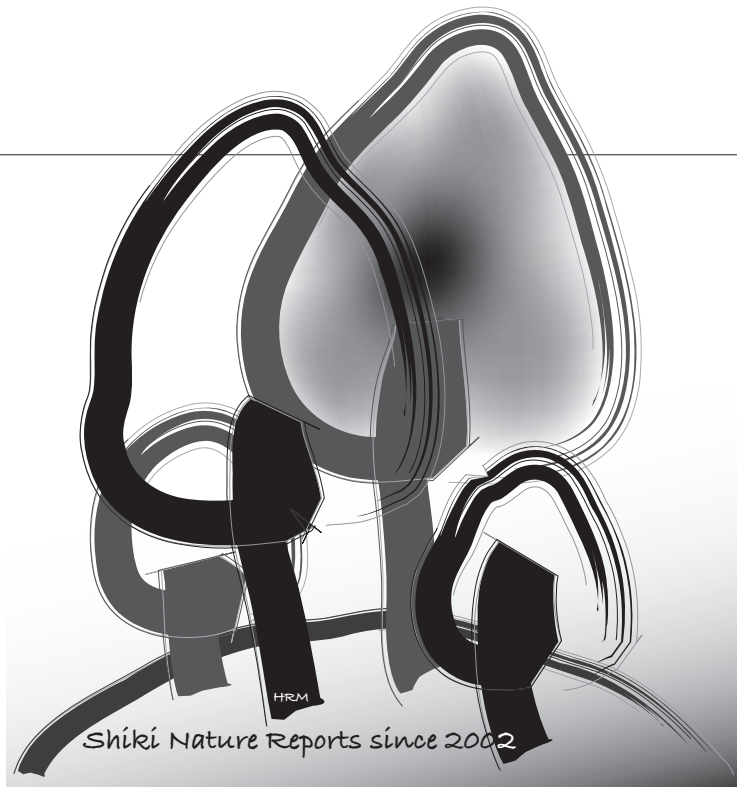
(杉山貞夫)

執筆者紹介

今回、巻頭の執筆をお願いした杉山さんは、本校の用務員さんです。用務の仕事は、諸君の学習環境を整備して下さることですが、環境美化、各種行事(収穫祭・運動会など)の準備を通じて、さまざまな支援をしてくださっています。環境美化については、校内に安易にゴミを捨てないように協力しましょう。

また、杉山さんご自身は元自衛官でもあり、青梅マラソン(30km)を2時間10分、フルマラソン(42.195km)は3時間16分(自己ベスト)で走り切る実力者でもあられます。姿を見かけたら、敬意を込めてご挨拶を。

(Interview: Miyahashi)



志木の自然[長月(9月), 神無月(10月), 霜月(11月), 師走(12月), 睦月(1月)]

Plants [2006年9月～2007年1月までの記録]

文化棟東縁のイチヨウ(2年前に落果を確認した樹)が十数個のギンナンを落とした。11月初旬までの高温のせい、オニグルミが新芽を出し、ヤマボウシ等が狂咲きをしている。

この学校には200種近い樹木があるが、そのうちのいくつかは1～数個体しか構内に生育していない言わば希少種である【別添分布図参照】。覚えて大切にして頂けると嬉しい。

Grass

14th Sep. 2006 ヤブタバコ, チヂミザサ, コナスビ, カナムグラ開花

21st Sep. 2006 ヒガンバナ開花.

28th Sep. 2006 オトコヨモギ, ヒメサクラタデ, キバナガンクビソウ, サナエタデ, シロザ, ホウキギク開花.

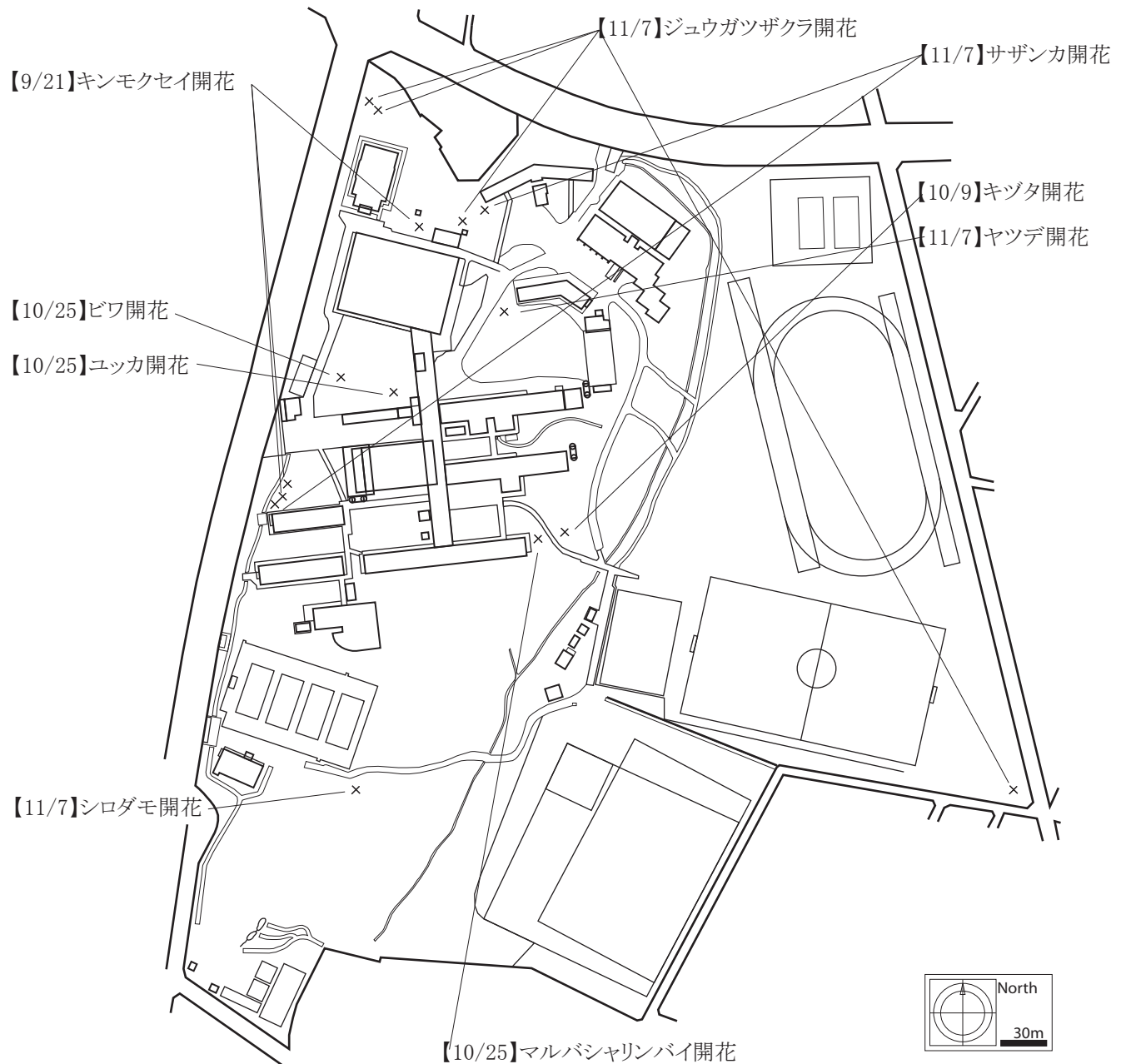
9th Oct. 2006 ヤマイモ, ホトギス, カゼクサ, コセンダングサ, アメリカセンダングサ, アキノノゲシ開花.

25th Oct. 2006 ツワブキ開花.

7th Nov. 2006 オギ, ハハコグサ開花.

22nd Dec. 2006 ナズナ, オオイヌノフグリ開花(狂い咲き?).

Wood



この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館で一度調べてみてください。

(Miyahashi)

井田良 前校長先生からの贈り物

ウサギ5羽が新年2日より、理科棟南側の小屋に住まうことになった(1羽は5日に死んでしまったので現在は4羽)。井田邸にはかなりの数のウサギがいたそうなのだが、その一部を今回いただいた。ノウサギの仲間は地面によく穴を掘る。今回貰い受けることが決まってからもともとあった小屋をウサギ用に改修したが、壁面周辺に石を敷いて簡単に穴を掘れない状態にした。しばらく、飼ってみようと思うので優しく見守っていただきたい。

(Miyahashi)

Biotope

校内の雑木林(冬編)

木々もすっかり落葉し校内の林も一番淋しく見える季節です。しかしこの季節でもうちの林は容易には踏み込めないほど林床が賑やかなのがわかります。アズマネザサ、シラカシ、アオキなどの常緑樹が林床を優占しています。これらは、雑木林を放置して藪になっていく指標種としてよく挙げられます。しかしこれらの種は本来この辺りにある種で、照葉樹林の構成種です。つまり学校の林も人手を加えないために本来の自然林に遷移していつているということです。しかしここ数百年は、この辺りは雑木林として、つまり生活や農業に利用するため、常に人手が加えられ維持されてきたのです。雑木林として人手を加え維持するか、自然の遷移に任せて照葉樹林に戻すのか、皆さんはどちらがよいと思いますか？

私の意見はこうです。

アズマネザサが繁ると林床の植物種は減ります。当然、希少種もなくなります。常緑樹が繁れば暗い林になり、昆虫などの動物種が減ります。彼らはもはや行き場をなくして雑木林に逃れてきた者達です。彼らを生かすために雑木林を維持していくべきではないでしょうか。何と言っても人と関わり親しみを感じれるのが雑木林で、人を寄せ付けない神の森が照葉樹林だと思います。

皆で雑木林を再生させませんか？

(Izawa)

Astronomy

年末大雨・年始大雨

今年は暖冬である。九州では年が明けてから紅葉したところもあるという。気象庁の季節予報でも1～3月の平均気温は全国的に(特に関東以西で)高い予想である。この直接的な原因は、何といっても大陸の高気圧(シベリアの気団)の勢力が弱く寒気の吹き出しが弱いことである。寒気の吹き出しの勢いは大陸にある高気圧の数字を見ればわかりやすい。1020hPa、1030hPa、1040hPaと寒くなるにつれ上がってくる。

年末・年始に日本列島の広い範囲に激しい雨が降った。これは低気圧が発達しながら日本付近を通過したからである。低気圧のコースは上空のジェット気流が支配している。例年であればもっと南を走っていて、低気圧は日本の沿岸から遠いところを通過してアリューシャン方面に向かうのだが、今期の年末・年始は日本付近の上空にいる。実は、このジェット気流を南に押しているのが大陸のシベリア気団で、この発達で低気圧のコースも決まるわけである。

今年最初の低気圧は爆弾低気圧といわれるものである。低気圧、正確には温帯低気圧(台風は熱帯低気圧)は、暖気と寒気のぶつかり合いで渦が生じ、上昇流・下降流が起こり、このうち水分を含んだ上昇流が雲をつくり、雨を降らせる。今回の場合、低気圧のすぐ後ろに控える大陸の寒気が発達しており、その強い吹き出しがアシストして非常に大きな低気圧を発達させた。そこで起こる現象は激しいもので、台風並みの災害(しかも雪もある)を警戒する必要がある。

暦の上では1月6日が寒の入り。バイカル湖の南のシベリア高気圧は5日1060hPaに達し、いよいよ寒気も本気を出してきた。平年よりも気温が高いとはいえ寒いことには変わらない。体を冷やさないように。

(Higuchi)

渡り鳥

年末から防火池にカルガモが来ている。つがいでの飛来は毎年三月下旬頃。今回の飛来は冬の食糧不足を乗り切るため、餌のもらえる環境を求めていることだろう。

宮城県の伊豆沼は冬の渡り鳥ガンやハクチョウの渡来地として有名である。伊豆沼は二年生が東北研修で訪れた登米の西隣りに位置する。マガンが日本で最も多く渡来する場所、四万羽近いガンがシベリアからやってくる。こうした鳥たちは、一月の平均気温が0度を下回らない「0度線」に沿って移動する。

0度より気温が下がると湖面が結氷し鳥たちはねぐらを失うため更に南を目指さなくてはならない。伊豆沼はほぼ0度線上、つまり湖面が結氷しないぎりぎりの湖と言われている。しかし年によっては全面氷結する年もあるという。伊豆沼では、夜明けと同時に四万のマガンが飛び立つ様を見ることが出来る。幾つかの群れに分かれ、V字型のいわゆる雁行の隊列を組み餌場に向かって飛んでいく。昼間は田んぼなどで餌を採り夜は湖に帰ってきて眠る。

ガンやハクチョウは秋冬を日本で過ごし、春になるとシベリアに帰っていく鳥である。春になってガンがシベリアに帰っていく姿を昔の日本人はこんなふうに歌った。

〈帰雁の歌〉

春来れば雁帰るなり白雲の道行ぶりに事やつてまし 古今集・平安初期

「みちゆきぶりにことやつてまし」は雲路遙かに帰っていく雁に北の友人への言伝てを頼もう、という意味。

故郷へ今へと向ふ雁がねも別るる雲の曙の色 式子内親王・平安末期

ちなみに冒頭のカルガモは渡り鳥ではない。日本で繁殖する数少ない鴨である。年が明けて寒に入り、防火池も結氷する日が多くなった。せつかく志木高に帰って来たのだがカルガモたちの厳しい冬は続く

（速水）

Stuff急募!!!

ウサギ小屋にウサギが入りました. ついては、飼育に協力いただけるスタッフを急募します.
やって頂くことは、一日一回、餌と水をやり、床を簡単に清掃するだけです. 1, 2年生で興味がある人は、地学準備室の宮橋のところに1月17日(水)までに申し出てください.

(Miyahashi)

執筆・担当区分	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	鳥類・植物	速水 淳子 (Hayami)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)